

平成24年度 特許版・産業日本語

—新たにスタートした「特許ライティング支援システム」活動について—

一般財団法人日本特許情報機構 特許情報研究所調査研究部長 **松田 成正**

PROFILE

平成6年特許庁入庁。半導体分野の審査官、審判官のほか、特許情報課、カリフォルニア大学客員研究員、情報システム課、技術調査課、企画調査課、審判課、情報技術企画室などを経て、平成24年4月特許審査第三部プラスチック工学主任上席審査官。7月より現職。

1 はじめに ～「特許版・産業日本語」～

産業技術文書を人に理解しやすく、機械翻訳を始めとする言語処理技術を活用するコンピュータにも処理しやすい日本語の研究は、「産業日本語」プロジェクトで進められてきました。これは、種々の言語処理技術を活用することによって、明瞭な日本語文の作成と高品質な翻訳文の低コスト作成を主な目標としています。

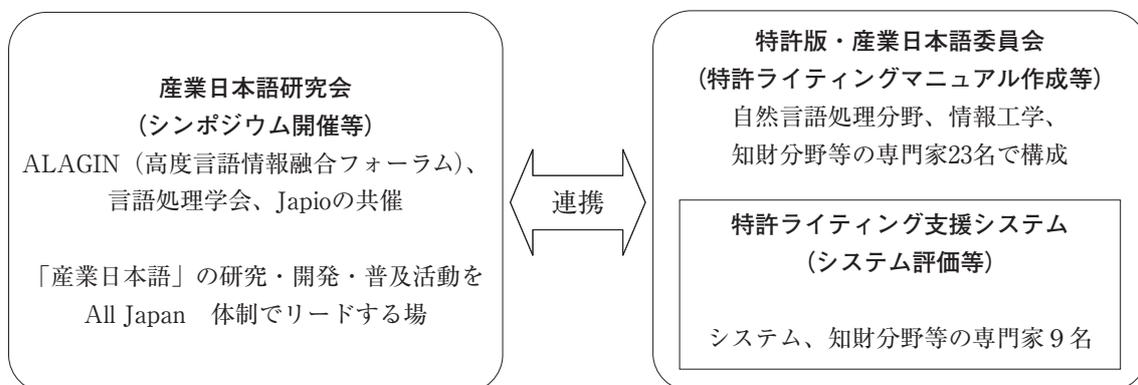
上記プロジェクトにおける(財)日本特許情報機構(以下「Japio」という)の枠組みとしては、自然言語処理分野や知財分野等の専門家の方々のご協力を得て、「産業日本語」を特許情報へ応用することを念頭に平成19年度から研究を開始し、今年で6年目(産業日本語研究会は平成21年度から)となります。その中で、特許明細書への応用に関するものを特に「特許版・産業日本語」委員会で扱い、特許文書そのものの改善からのアプローチを主に研究しています。

本稿では、「特許版・産業日本語」委員会のもとで、今年度、新たにスタートした「特許ライティング支援システム」の取組について、私見を交えながらご紹介します。

2 特許情報を取りまく環境

経済や企業活動の急速なグローバル化を背景に、近年、我が国における国際特許出願件数は急激に増加し、また、世界的にみても海外出願が増加傾向にあり、国内外を問わず特許情報の正確かつ円滑な流通が不可欠となっています。

一方で、特許関連文書は、権利範囲を示す文書でもあることから、一文が長く、さらに、専門用語、特許特有の言い回し、そして、一般化されたいわゆる抽象表現等が多く含まれます。そのままでは、コンピュータによる高度な文書処理(機械翻訳や検索、情報管理の高度化)が難しいとされています。



平成24年度 「産業日本語」の推進体制

このように、コンピュータによる高度な文書処理に課題があるなかで、特許情報の正確かつ円滑な流通を推進するためには、今まで以上に、特許文書そのものの改善からのアプローチが求められているといえます。

3 「特許版・産業日本語」の新たな取組

(1) 特許ライティング支援システムのスタート

前述の特許文書そのものの改善からのアプローチを推進する「特許版・産業日本語」委員会の新たな取組として、今年度から「特許ライティング支援システム」をスタートさせました。

これは、大変な好評・反響を得た「第3回産業日本語研究会・シンポジウム」（平成24年2月）の産業日本語関連技術のデモ展示を契機としています。

(2) 具体的な取組内容

新たな取組は、特許明細書作成を支援するシステムを3社のご協力を得て、実務者（弁理士）が以下のシステムA～Cを実際に利用します。そして、特許ライティングの実務現場にとっての有効性等を検証・発信することで、支援システム全体の普及を目指す試みです。

○システムA（特許明細書を半自動生成）

特許請求の範囲と同様の文書、技術用語の説明、課題、効果などを記載した文書を言語解析し、その解析結果を基に、特許明細書を半自動生成するシステム。

○システムB（文書の可読性を診断）

構文解析などをもとにあいまいな表現を検出することで、文の可読性を診断した結果、解釈を誤りやすい箇所を指摘して診断メッセージを表示し、修正をアドバイスするシステム。

○システムC（読解を支援）

特許請求項の引用関係解析とツリー表示、各特許請求項の構造解析とツリー表示、特徴的な単語の検出とカ

ラー表示により、特許請求の範囲の読解を支援するシステム。

上記3つのシステムは、いずれも特許文書の品質向上と作成効率アップを目的とし、前述の特許文書そのものの改善からのアプローチに沿うものです。

これらのシステムを使って特許文書を作成しつつ、評価軸を工夫し、各システムの強いところと弱いところを適切に評価します。

そして、検証対象とするシステムを増やししながら結果を発信することにより、支援システム全体の普及が図られ、最終的には、機械翻訳や検索、情報管理の高度化へつながるものと考えています。

4 取組への期待

このような特許文書の品質向上につながる支援システムを実際に使うこと、すなわち、「産業日本語」関連技術を特許実務の現場で検証することは、「特許版・産業日本語」委員会にとっては、初めての取組となります。

この取組によって、「産業日本語」プロジェクトの目標の1つを具体的かつ身近に実感できます。そして、同プロジェクトの応用例を分かりやすく、世の中に発信できる効果があるとともに、今後のプロジェクトの方向性に対するヒントやアイデアが得られるものと、大いに期待しています。

5 おわりに

Japioにおける「特許ライティング支援システム」の取組は始まったばかりですが、将来の発展形として、翻訳支援系、先行技術調査支援系等とのシステム間連携の研究にもつなげていければと期待しています。

引き続き、各方面の皆様のご支援、ご協力を賜りながら、「産業日本語」について特許情報への応用を進めて参りたいと思います。